

## 「三子追福之碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
浦和〇四	三子追福之碑	藤沢雄風	岡本定	藤沢雄風

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
長谷川慶次郎	一八八二・明治一五	浦和区岸町	調公園	

### 一．はじめに

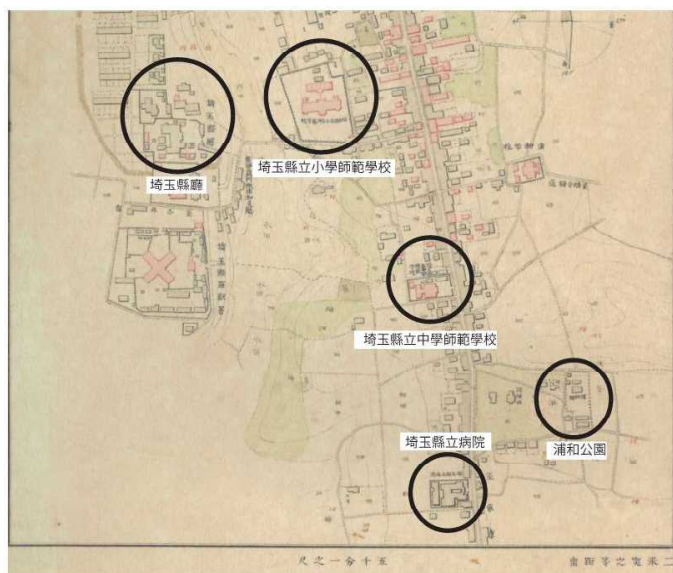
本石碑は、埼玉県中学師範学校の同級生三名が亡くなったことを悼み、学生の発案で作られた慰霊の碑である。手習い師匠を顕彰した筆子塚・筆子塔や、名士顕学を顕彰した石碑は数多くあるが、これからの嘱望されていたとはいえ、まだ何事もなしていないごく普通の学生を悼む碑は珍しい。

明治五年の改正局から始まった埼玉の師範教育は、同年に、岸村に新校舎を建てて入った埼玉県立の師範学校から本格化した。十一年の明治天皇の行幸を契機として稲荷丸の地に鳳翔閣が建てられると、県立学校は小学師範・中学師範・医学校の三校に分かれ、小学師範は新設の鳳翔閣を、中学師範は元の岸村の校舎を使用することとなる。同十二年に中学師範は埼玉県立中学師範学校と改称され、新たに生徒の募集を開始した。ところが、県立の中学師範学校は文部省の認めるものとはなっていなかったこともあってか、同十五年六月をもって、中学師範学校は小学師範学校に合併され、姿を消すことになった。埼玉大学教育学部同窓会（教友会）発行の「会員名簿」には、中学科卒業として、明治十五年から十九年の五年間（二十年がひとりだけ）の名簿が残されているのみである。

この碑文に登場するものたちは、中学師範学校の一期生だったと思われる。そして建碑が同十五年五月で、中学師範学校の合併消滅が同年の六月であることを考えると、中学師範の最後を飾る活動として建碑がはかられ、碑文のかたちで中学師範の存在を残そうとしたのかもしれない。

日本陸軍参謀本部陸地測量部は、全国的な基本測量の実施に先立ち、関東平野のほぼ全域と房総・三浦半島について、明治十年代に「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」を作成した。「フランス式迅速測図」と略称されるこの地図は、おおむね二万分一であるが、重要な市街地などは五千分一で作成されている。「浦和駅」も五千分一図が作成されており、図2はその一部である。これを見ると県庁の東、現埼玉会館あたりに「小学師範学校」、その南の現東和銀行の地に「中学師範学校」、更に南の調神社向かいやや南に「埼玉県立病院」が見える。

石碑は横長の長方形で、正面は平らだが、裏面は丸みが残る。碑文は正面で、裏面には、建碑に関わった、師範生の名前がしるされている。



【図2】 小学師範学校、中学師範学校（及び県立病院）の記載があるフランス式地図



【図1】 石碑写真

二、翻刻並びに詠注

(表面)

■翻刻

◎題額

三子  
追福  
之碑

◎碑記

埼玉縣中學師範學校長補木原元禮篆額  
嗚呼三子逝矣切認之言不可復聞吾儕將以何  
進德成業吾儕與三子以明治己卯應本縣中學  
師範科之募就試中選同窓切劘親過骨肉相勗  
以道義出入起居莫不與俱而今己矣悲哉衆泣  
相謂曰三子既各歸葬其鄉惟其好學之篤交情  
之切非佗人所得而比念其神或將伴風霜戀落  
月彷徨寒煙衰草之間而不能去歟乃議建碑於  
麗和公園慰其靈以伸追慕之心焉於是教員校  
吏校友諸子聞而義之各寄金若干以助其費三  
子為誰曰柳瀨三之助埼玉郡人樸茂勉學人期  
其有成辛巳四月七日病歿麗和病院年十九日  
大塚教行舊笠間藩士聰敏而篤摯夙以文章稱  
最為衆所推三月某日疾作六月十日歿覺舍年  
二十三自初疾至死交友看護靡不至亦可以見  
其為人曰松本與近舊川越藩士爲人温厚善數  
術八月二十九日病歿于家少教行一歲銘曰

形魄歸地 龔豈無知 形藏各地

魂尚樂茲 親朋祭爾 來饗來嬉

明治十五年龍集壬午五月

埼玉縣中學師範生岡本定撰

埼玉縣十等屬藤澤雄風書

長谷川慶次郎鐫

●異体字など  
○埼 埼。 ○窻 窓。 ○己 己に同じ。 ○聰 聰。 ○覓 魂。 ○明 明。

■ 訳注

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

埼玉縣中學師範學校長補木原元禮篆額。  
嗚呼、三子逝矣。

切認之、言不可復聞。

吾儕、將以何進德成業。

吾儕、與三子、以明治己卯、應本縣中學師範科之募、就試、中選。

同窓切齋、親過骨肉、相勗以道義、出入起居、莫不與俱。

而今已矣。悲哉。

衆泣、相謂曰、

三子既各歸葬其鄉。

惟其好學之篤、交情之切、非佗人所得。

而比念其神、或將伴風霜、戀落月、彷徨寒煙衰草之間、而不能去歟。

乃議建碑於麗和公園、慰其靈、以伸追慕之心焉。

於是、教員校吏校友諸子、聞而義之、各寄金若干、以助其費。

三子爲誰。

曰、柳瀬三之助。

埼玉郡人。

樸茂勉學、人期其有成。

辛巳四月七日、病歿麗和病院。

年十九。

曰、大塚教行。

舊笠間藩士。

聰敏而篤摯、夙以文章稱。最為衆所推。

三月某日、疾作、六月十日歿鬻舎。

年二十三。

自初疾、至死、交友看護靡不至。

亦可以見其為人。

曰、松本與近。

舊川越藩士。

爲人溫厚、善數術。

八月二十九日、病歿于家。

少教行、一歲。

銘曰、

魂魄歸地 魂豈無知。

形藏各地 魂尚樂茲。

親朋祭爾 來饗來嬉。

明治十五年龍集壬午五月  
埼玉縣中學師範生岡本定撰。  
埼玉縣十等屬藤澤雄風書。  
長谷川慶次郎鐫。

●訓記

埼玉縣中學師範學校長補木原元禮篆額。  
嗚呼、三子逝<sup>ゆ</sup>けり。

切に之<sup>おの</sup>を認<sup>おも</sup>ふも、言復た聞くべからず。

吾が儕<sup>ともがら</sup>、將に何を以て徳に進み業を成さんとするや。

吾が儕と三子とは、明治己卯を以て、本縣中學師範科の募に應じ、試に就きて、選<sup>あた</sup>に中<sup>あた</sup>る。

同窓切劘、親は骨肉を過ぎ、相ひ勗<sup>つと</sup>むるに道義を以てし、出入起居、與に俱にせざるはなし。

而して今<sup>や</sup>已めり。悲しいかな。

衆泣き、相ひ謂ひて曰く、

三子既に各々其の郷に歸葬せり。

惟だ其の好學の篤き、交情の切なる、佗人の得る所に非ざるなり。

而して其の神を比<sup>な</sup>び念ふに、或ひは將に風霜を伴ひ、落月を戀ひ、寒煙衰草の間に彷徨して、去る能わざらんか、と。

乃ち議す、

碑を麗和公園に建て、其の靈を慰し、以て追慕の心を伸ばさんことを。

是において、教員校吏校友諸子、聞きて之を義とし、各々金若干を寄せ、以て其の費を助く。

三子は誰たるか。

曰く、柳瀬三之助。

埼玉郡の人。

樸茂勉學、人其の成る有るを期す。

辛巳四月七日、病みて麗和病院に歿す。

年十九なり。

曰く、大塚教行。

舊笠間藩士。

聡敏にして篤摯、夙に文章を以て稱せらる。最も衆の推す所となる。

三月某日、疾作り、六月十日、覺舎に歿す。

年二十三。

初めて疾みてより、死に至るまで、交友看護して至らざるなし。

亦た其の人となりを見るべし。

曰く、松本與近。

舊川越藩士。

人となり温厚にして、數術に善し。

八月二十九日、病みて家に歿す。

教行より少きこと、一歳なり。

銘に曰く、

形魄は地に歸る 魂は豈に知無からんや。

形は各地に藏す 魂尚ほ茲に樂しむ。

親朋爾を祭す 來りて饗せよ來りて嬉せよ。

明治十五年龍集壬午五月、

埼玉縣中學師範生岡本定撰す。

埼玉縣十等屬藤澤雄風書す。

長谷川慶次郎鐫す。

### ●人物

○木原元礼 文政七（一八二九）年から明治十六（一八八三）年。諱は元礼、字は節夫、号老谷。土浦藩士の子として生まれる。昌平黌に入学し、藤野海南、岡鹿門、重野成斎などと同学研鑽した。帰藩して、藩の文学となる。維新後、修史局につとめるが病で辞任。明治十三（一八八〇）年、県令白根多助の招聘で、埼玉中學師範学校校長補となり、同十五（一八八二）年に、埼玉県師範学校と変わった学校の校長となる。著に、死後に編纂された「老谷遺稿」がある。重野成斎による「墓碑銘」がある。

○柳瀬三之助、大塚教行、松本與近、碑文以外の情報は無い。

○岡本定 埼玉県立文書館所蔵史料に、明治期に中学校に任用された「岡本定」の名前が見える。この「岡本定」が碑文の撰者だとすると、明治十五（一八八二）年九月の児玉郡賀美郡那珂郡榛沢郡公立児玉中学校校長兼教諭から、同四十四（一九一）年五月の川越中学校教諭までの任用が確認できる。

○藤沢雄風 不詳。好古社編「好古類纂」という明治三十五年刊の書籍に、「東海談抄録（篠崎維章著 藤沢雄風編）」という記事がある。あるいは彼か。篠崎維章は、号東海（一六八六〜一七三九）。儒者だが日本の古典籍や有職故実にも詳しくかった。この書は、篠崎の主著である「東海談」の抄録のようである。

○長谷川慶次郎 不詳。

### ●注

○進徳成業 進徳とは、徳目を備えた人格になることで、成業は、学業など自らのなすべき事業を成し遂げること。「周易」乾文言伝に「子曰、君子進徳脩業」とある。

○吾儕 われわれ。

○明治己卯 十二年、西暦一八七九年。

○本縣中學師範科之募 「はじめに」で述べた如く、中學師範科の第一期であろう。第一期生ともなれば、その意欲や同級生とのつながりも、ことさらに強いものがあつたと推測される。

○切磨 こすりみがく。転じて、学徳を磨き修めること。また朋友たがい励まし合うこと。切磋琢磨。

○勗 励まし努める。

○道義 人の行うべき正しい道。

○出入 出たり入ったり。ここでは校舎に入つての勉学学業という公的活動と、校舎を出

てからの私的な活動。

○起居 起き上がったときと座っているとき。日常生活。

○已 完全に終わる。三子との生活がもはや二度と送れなくなったことを言うか。

○比念 熟語はないが、寄り添い思う。あるいは「比」はこのごろ。そうであれば、「比このごろ其の神を念ふに」となる。

○風霜 風と霜。風雨にさらされていることか。

○落月 西に傾き沈みかかった月。

○寒煙 さびしげな霞やもや。

○衰草 枯れかかった草。

○麗和公園 麗和は浦和の美称。浦和公園。今の調公園。

○諸子 目下のものへの呼びかけに用いるが、ここではいろいろな、各界の方々くらいではないか。

○埼玉郡 武蔵国東部地域を占める。今の熊谷市・加須市・久喜市・草加市などが含まれる。

○撲茂 すなおで人情があついこと。朴茂。

○勉強 つとめまなぶ。学問をはずむ。

○有成 大成する。

○辛巳 明治十四（一八八一）年。

○麗和病院 埼玉県立病院のことだろう。県立病院について概略を述べれば、県令白根多助の希望で開設された埼玉県医学校は、診療所を併設していた。しかし、明治十二年に医学校が廃校になると、診療所は県立病院として、浦和と熊谷に新発足した。しかし、赤字累積などにより、同二十三年に廃止となった。この浦和にあった県立病院が、ここに言う麗和病院であると考えられる（図2地図参照）。

○笠間藩 常陸の国にあった藩。幕末は譜代牧野氏で八万石。

○聡敏 かしく道理に通じている。

○篤摯 親切でまじめなこと。

○覺舎 まなびや。

○川越藩 武蔵国一の大藩。藩庁は川越城。江戸後期は親藩松平家十五万石だったが、幕末維新期は譜代松平家八万石。

○銘 碑文の本体といえる銘文。韻文で書かれ、これ以前の散文の記は、いわばその序文。四字句が多い。ここでは、「知」「茲」「嬉」「韻」が押韻。

○形 人間の肉体。死ぬと大地に帰すと考えられた。

○魄 人間の靈魂のうち、肉体を司るもの。死ぬと形とともに大地に帰すと考えられた。

虎の魄が、虎魄（琥珀）。

○魂 人間の靈魂のうち、精神を司るもの。死ぬと肉体から離れ、天に昇ると考えられた。ただし、正しく祀られないと、この世をさまよう「幽鬼」ともなるとされた。

○嬉 漢文的には、遊び戯れる。たのしむ。日本の中世以降では、心に喜びを感じる、うれしい。ここはたのしめ、かよろこべか。

○龍集 一年。……の年。

○十等屬 県官の職位か。

●口語訳

埼玉県中学師範学校校長補の木原元礼が篆額を書いた。

【三子が永遠の別れをしてしまったこと】

ああ、三子は逝ってしまった。

心から彼等のことを思うものの、もう二度と、その声を聞くことはできない。

残された私達は、いったい誰と俱に徳に進み学業を成就させればよいのか。

【三子との豊かな関係】

私達と三子とは、明治十二年に、はじめての埼玉県中学師範学校の生徒募集に応募し、試験を受け、合格したものである。

以来、同窓生として切磋琢磨し、その親しむことは親族以上であり、道義の道を進むことをもってお互いに励まし合い、学校でも勉学でも、同学としての交わりでも、いつも一緒でもにしないことはなかった。

【突然の別れ】

それが今やまったくできなくなってしまった。なんと悲しいことか。

【三子追悼の思いと建碑】

残された私達は、泣く泣く相談をした。

三子の遺体は既に故郷に帰り埋葬されている。

しかし、私達と彼等との間につちかった、ともに学問を好むことにおける手厚さと、深切なる友情の交わりというものは、他の人々が介在することのできるものではない。

まして、彼等の魂を寄り添い想起するに、(本来故郷へ帰るべきなのに、この浦和の師範学校や私達に未練があるため)、あるいは風霜にさらされながら、沈みかかった寂しげな月を眺め、寒々とした靄や枯れかかった草の間で、よりどころもなくさまよい、この地から去ることができないでいるのではないか、と思われてならない。

そこで、石碑を麗和公園に建てて、三子の霊を慰め、それによって私達の彼等を追慕する心を伸びひろげてはどうか、と。

かくして(建碑を提起したところ)、師範学校の教員や職員たち、さらに交際のあった友人や各界の方々が、この挙を「義」としておのおの若干の寄付を寄せていただき、建碑の費用を助けていただいた。

【三子の紹介】

ここに祀る三子とはだれか

ひとりは、柳瀬三之助君。

君は、埼玉郡の人。朴訥素直で人情に厚く、勉学に励んで止まなかった。人々はきつと大成するだろうと期待していた。

それが、入学三年後の明治十四年四月七日、病気になる、埼玉県立病院で病没した。享年、十九歳であった。

ひとりは、大塚教行君。

君は、もと笠間藩の藩士。かしこく道理に通じていて、親切で真面目であった。はやくから文章を書くことに長けており、賞賛されていた。もつとも衆望を集めており、期待が高かった。



それが、同年三月某日、発病、六月十日、師範学校の校舎で亡くなった。享年二十三歳であった。

発病してから没するまでの間、交友みんなが代わる代わる看護して、励ました。そこから、人望が厚かった君の人となりや推し量ることができよう。

ひとりは、松本與近君。

君は、もと川越藩の藩士。ひととなり温厚で、数学を善くした。

八月二十九日、病を得て、自宅で逝去した。

大塚君より、一歳の年少であった。

【銘】

銘文

肉体と魄は大地に帰るが、魂はどうなるのかは分からない。

骸はそれぞれの故郷に葬られたが、魂は今も尚お、この師範学校の地で楽しんでいるのではないか。

われわれともがらがあなたたちをお祀りします、どうか来臨して祀りを受けてください、どうか来臨して、われわれと楽しんでください。

【記録】

明治十五年、壬午の年の五月、

埼玉県中学師範生である岡本定が撰文した。

埼玉県十等属である藤沢雄風が揮毫した。

長谷川慶次郎が鐫刻した。

(裏面)

■翻刻

師範生連名

柿澤玉城	杉山文悟
高篠三四郎	内田林平
鈴形悌三郎	島甲子二
岡本定	佐々木英寛
尾形渡一	木原守三郎
奥山銀朔	新藤駒次郎
新井周吉	杉本千三郎
石川和助	山内菊之助
齋藤竹次	西村正三郎
河合鋌太郎	山田米太郎
山田源次郎	伊原真次郎
清水精三郎	古市熊三
關 丹平	古田房吉
平田芳太郎	植村善作

●語注

○柿澤玉城 「埼玉大学同窓会（教友会）」名簿\*（以下「名簿」）「明治十六年高等科卒業」にその名が見える。

○高篠三四郎 「名簿」「明治十六年高等科卒業」に、その名が見える。

○奥山銀朔 「名簿」「明治九年小学師範科卒業」に、その名見える。

○關丹平 「名簿」「明治十六年高等科卒業」に、その名が見える。

\*ここには、卒業者全員の名前があるのではなく、「逝去者」の欄のみあり、逝去が同窓会に届け出られた者の名前のみが掲載されていると考えられる。

### 三. 主な参考文献

#### ① 翻刻

・浦和市郷土文化会編『浦和の石ぶみ』（浦和市郷土文化会、一九八七）

#### ② 師範学校関係

・埼玉県教育委員会『埼玉県教育史 第三卷』（埼玉県教育委員会、一九七〇）

・埼玉大学教育学部百年史編集委員会編『百年史』（百年史刊行会、一九七六）

・埼玉大学教育学部同窓会（教友会）事務局『会員名簿（平成二八年版）』（二〇一九）

以上

二〇二三年七月 薄井俊二訳す